

まえがき

二〇一八年六月二二日、史上初となる米朝首脳会談が開催された。これと寄り添うように同年四月、五月、九月と一年の間に三度もの南北首脳会談が開催され、現在朝鮮半島の平和定着へと向けた歩みが着実に積み重ねられている。年が明けた二〇一九年にもこの流れは淀むことなく二月には第二回米朝首脳会談が行われ、D・トランプ大統領と金正恩国務委員長が再び膝を交えた。この会談結果は芳しくなかったと伝えられ、現在その進捗速度に調整が見受けられるものの、そもそも時間のかかる軍備管理および軍縮の一環である非核化交渉が、七〇年を超えて敵対し続けてきた米朝間において、紆余曲折を経ながらも一歩ずつ前進していること自体、驚くべきことといえよう。

事実二〇一七年末の時点で、このような状況が訪れると事前に見通した人はどれほどいたのだろうか。ほんの二、三年前の二〇一六―二〇一七年ですら、朝鮮半島は核危機に揺れていた。核実験と弾道ミサイル実験を繰り返し核保有国であることを自認する朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）と、さらなる核開発の進展を防がんと軍事的・経済的圧力を強める覇権国アメリカ合衆国（以下、米国）との間に緊張が形成されたのである。

加えて、得体的知れないトランプ政権が発足したばかりとあって、今にも第二次朝鮮戦争が勃発しそ

うであるという緊迫したニュースが連日メディアを賑わせた。とりわけ朝鮮半島問題の専門家といわれている先生方でさえ、情報の渦の中で一喜一憂されていた姿が印象深い。ある時たまたまつけたテレビ番組で、テレビによく出演している方が、「二〇一七年秋までに米国は北朝鮮に先制攻撃する」と自信満々に断言していたのを見た時には、開いた口が塞がらなかつた。

それらの狂騒を横目に、多くの人たちはある種の既視感を覚えたのではないだろうか。私もその中の一人である。なぜなら、米朝間に朝鮮半島核危機が訪れたのはこれが初めてではないからだ。冷戦体制崩壊後（ベルリンの壁崩壊から）三〇年の間に、少なくとも四度にわたり朝鮮半島核危機は発生してきた。第一に金日成・金正日・B・クリントン間で生じた第一次核危機、第二に金正日・ブッシュJr.間で形成された第二次核危機、第三に金正日・金正恩・B・オバマ間で形成された第三次核危機、そして二〇一七年に四度目の緊張が金正恩・D・トランプ間に生じたのである。

本書の目的は、上記のような冷戦体制崩壊以後、米朝の間で朝鮮半島核危機がなぜ繰り返されてきたのか、という問いに答えることにある。そして本書では、この自分なりの答えをスパイラル・モデルという国際関係論を分析枠組みとして用い、事例検証をいくつも重ねることで導き出している。

博士論文を基にしているため、読者の方々において当初堅いイメージを持たれるだろう。特に前半部分にある分析枠組みとなる国際関係論（スパイラル・モデル）についての説明の部分で、読み進められるのに少し苦労されるかもしれない。ではこれを承知しつつ、なぜ国際関係論を通じた分析・検証をしたのだろうか？ それは、極力恣意性を排除し、客観性を確保したかったからである。

米朝間の緊張形成のみならず、国家間の緊張形成要因を検証する手法は歴史的アプローチが多くを占めてきたが、そこには国家首脳の意図や動機といった目に見えないものに対する憶測が観察されてきた。ここで問題なのは、そのような憶測には、分析する者自身の性向や嗜好などによって構成された主観が多かれ少なかれ反映される傾向が見られる点である（昨今のマスメディアを覗けば顕著であろう）。本書では、国際関係論という分析対象の一部分を照らすレンズ（方程式といってもいいかもしれない）を使用することで、そのような分析・検証上の恣意性を極力なくしたいということを意図した。もちろん完全なる主観の排除は難しいにせよ、要は、一喜一憂しない見方をもって朝鮮半島核危機を分析してみようという試みなのであるが、読者の方々においては、このような意図を踏まえられた上で、我慢強く読み進めていただければ幸いである。

もちろん国際関係論を分析枠組みに据えることによる限界もある。例えば、理論は多面体である現実の一部分を照らしうるのであって、その全体を説明することはできない。しかしながら、理論という方程式によって浮かび上がる現実の一部分には、主観的な推測が介入する余地がより少なく、そこから導き出された一つの答えには普遍性を見出しうる。そして、普遍性を帯びるということは、自ずと、未来予測につながる可能性が生じることでもある。

またもう一つの本書の特徴は、冷戦体制崩壊以後約三〇年にわたって発生した五つの事例（十補論）について、検証した点にある。三〇年——世界的に機密文書が開示される目安——という月日を一貫して見つめることによって、はじめて浮かんでくる何かがある。

米ソ冷戦が終わり、それまで米ソ対立の下部構造に置かれていた北朝鮮というアクターが核開発をめぐり、はじめてソ連と中国の後ろ盾なしに米国と直接対峙する構図が現れるようになったのだが、そこ

からようやく三〇年が経った今、こうした長いスペインの歴史を全体の流れとして観て、その傾向が何であったのかをより正確に捉える研究が可能になったといえる。

そして、ここから浮かんでくる何かは、なぜ朝鮮半島が冷戦体制崩壊以後も米ソ冷戦の残滓にまだまだ苛まれているのか、について重要な示唆を与えてくれるものでもある。

本書の大きな構成であるが、まずなぜ冷戦体制崩壊以後、米朝の間で核危機が繰り返されてきたのか、という問いに対しての仮説検証を、二〇一五年に提出し学位審査を通過した拙論（博士論文「冷戦体制崩壊以後における米朝間の緊張形成要因についての考察——スパイラル・モデルの観点から」）をベースとし、最新の研究成果を適宜加えつつ行っている。その上で、二〇一七年一月の火星15号発射実験成功などの北朝鮮における核兵器高度化を踏まえ、最新の事例を反映した米朝間の緊張形成についての分析を、「補論」というかたちで書き加えた。

このような構成にしたのは、なぜ核危機が繰り返されてきたのかというリサーチクエスションに対する博士論文における検証結果が、現在から見返しても色あせておらず、今も学術的批判に耐え十分に学術的貢献をなしているものと判断したからである。もう少し砕けた言い方をすれば、二〇一五年に書かれた拙論における分析は、そこからおよそ五年を迎えようとしている現況に照らし合わせた「答え合わせ」にほぼ合格している、と自負しているがゆえに、あえてこのようなかたちをとったということである。読者の方々には読み進められつつ、この自信過剰かもしれない著者の自負の是非についても、あわせてご判断いただければ幸いである。

もちろん、まどろっこしい理論部分は飛ばして興味のある事例部分から読まれてもよいし、また手取り早く最新の事例（トランプ政権・金正恩政権間における緊張形成）についての知見を得たいと思われる読者におかれては、「補論」から読み進めていただければ、その知的欲求が満たされるはずである。いずれにせよ、本書が読者の方々の北朝鮮の核問題に関する知的好奇心を満たすものであるように願うばかりであると同時に、本書を手にとっていただいたことであつたこの御縁にただただ感謝申し上げる次第である。

最後に本書は、近現代史において常に大国のパワーゲームの犠牲となり続けてきた朝鮮半島の平和定着を願い、書かれたものであるということをお願いしておきたい。